

神の計画

1. 人間の進歩には二つの形式がある。一つは霊能の開発、他は霊性の浄化。もし霊性の錬磨をさしおいて霊能だけの開発をはかるなら、その人はいつまでも低い霊的境涯にとどまらねばならない。

反対に、両者ともどもに発達をはかるなら、大霊能力者となるだけでなく、人間としても立派な人物となる。

2. 神法に逆らって生きようとする者は、自ら辛い収穫を刈り取る者。神法に従って生きる者は、物質的にも霊的にも豊饒^{ほうじょう}と幸福の収穫を、その手で刈り取る者である。

3. 皆さんは、すべて神の分身である。神は次のように言い給う、「ここに私のすべての法がある。そこに、汝の内に、私の分身がある。汝の傍には、この世を完全にできる一切のものが備えられている、私は汝にすべてのものを与えたのだから。汝は善でも悪でも、好きなものを選ぶことができる。汝は私の法に従うもよし、また従わぬも思いのまま」と。

4. 何事も、目の前の結果で判断してはいけない。人はただ、物質の目だけで物を見るが、もし人が霊の目で物を見ることができれば、完全な正義がすべての人に等しく働いていることが分かるだろう。

折にふれ、私は皆さんの祈りに耳を傾けることがあるが、もし、神がそのすべてをお聞き届けになれば、結果的にみて、それは皆さんのためによりしくないのであろう。

5. 神のものであるものは、犠牲なしでは、何事も成就しない。人は涙をもって、建設を贖いとらねばならない。大きな物質的不幸が来て、初めて人は霊的なものへ、心を向け始める。あらゆる物質的なものが倒れて後、初めて、人は一本の藁^{わら}を求める。

明日の世界

1. 人類が学ばねばならないことは、神の賜物はすべての人々の間で、正当に分かち合わねばならないということ。ある人は食べることにこと欠き、ある人はあり余る物を持っている。これは間違いだ。人類はその持つところのすべてを、すべての人々の間で分かち合わねばならない。それは単純なことではないか。

神法について

1. 人生はその行為だけでなく、その言葉、その思念からも成り立っている。

行為がすべてと思っていけない。勿論、行為は重要だ。しかし言葉と思念もものを言う。悲しいかな、貴方がたの多くは、思念の主とならず、その奴隷となっている。

2. 人はすべて、一人ひとりが神の分身であり、一人ひとりが神の御業と力と愛と知とを、担うことのできるものである。かり

に貴方が弱い人に手を差しのべれば、神の力はたちまち貴方を通じて、働くようになるのである。

3. どのようにそれをするか、誰を助けるか、どこで闇に光を点ずるか、そんなことは問題でない。

ただ、貴方が失意の人を立ち上がらせ、力なえた人に力を与え、暗いと所に光を灯し、飢えた人には食を、枕する所のない人には、寝ぐらを与えさえすれば、それでよいのだ。

4. 神は物質的なものと、霊的なものと、ともに支配し給う。神の大国には、両者の差別はない。物的生命と霊的生命と差別してはいけない。両者は別個の分離したものではない。物は霊に作用し、霊はまた物に作用する。両者はともに、一なる不可分の生命の両面である。

5. 神法は調和と正義に満ちていて、その働きにはいささかの狂いもない。

一人としてその罪を逃れ、誰一人として、その報いを受けずに終わるということはない。物質を見る目で永遠をはかってはいけない。まだ大いなるものを見ないで、小なるものを断定してはいけない。

神について

1. 「神とは何ですか」

神とは宇宙を貫く法である。神とは、あらゆる生命の背後にある創造力である。神とは完全な愛であり、完全な英知である。

神とは、宇宙のありとあらゆる所に瀾^{びまん}漫した存在である。

神はあらゆる生命を満たし、あらゆるものの内部に在り給う。

神は大いなる霊であり、生命であり、愛であり、またありとあらゆる存在するもののすべてであり給う。

祈りの価値

1. 祈りとは唯一つしかない。即ち「どのように奉仕したらよろしいか、お教え下さい」これである。

この神と人類への奉仕の願い、これより大きな仕事はない、これにまさる愛はなく、これにすぎる宗教も哲学もない。どの道で奉仕するかは問うところではない。たとえば神法の真理を述べ伝えるか、飢えた人に食を与えるか、または苦しむ人の心から悩みを取り除いてやるか、道はそれぞれ違って、肝心なことは唯一つ、いかにひたすら奉仕するか、このことである。

キリスト教の誤謬

1. 信条が人を縛りつけている、これは地上の不幸である。これは疫病よりも、肉体をむしばむ病気よりも悪い。それは魂の災厄である。それは魂の目かくしである。

2. 私達が戻って来たのは、余の儀ではない。皆さんがどんな一人の人にも盲従することのないよう、一冊の教典、一つの教派、一人の指導者、この世であれ霊界であれ、いかなる者にも盲従することのないよう説くためである。そして従うべきものは唯

一つ、神の法これである。何となれば、この法だけは絶対に誤ることのない狂いのないものであるから。

3. イエスは神の通路であり、人間の理想である。即ち人間なら誰でも、天与の神性を發揮しようとしさえすれば、彼のようになることが出来る、そんな意味での人間の手本である。

4. 自由になることを学びとりなさい。自らを閉じこめるな。自分の周りに垣根を作ったり、外から入る新しい靈感を拒んではいけない。真理とは絶えざる探求である。貴方の中で真理の境界は日に日に拡大しつつある。何となれば、魂が進歩するにつれ、心もこれに応じるものだから。

信条と真理

1. もし人々が幼児のような心になり、過去からのどんなドグマにもとらわれなければ、真理は極めてたやすく理解できるものである。

真理とは、新しい教義や信条をつくらうなどの欲があつては駄目で、唯幼児のように素直に求める心、どんな犠牲を払つても、ひたすら正しいものを見出そうという心、この態度にして初めて現れるものである。

人間の成長

1. 人の自由意志は、自分が現在達している進歩の器量に應じて發揮できるにすぎない。人の行為もまた自己の器をこえて何事

もなすことは出来ない。

すべてその魂の進歩の段階によって、限定されているのである。

2. 人は神の一部であり、無限の神性が發揮できるようになっている。人はその神性が發揮されるにつれ、高遠な法が分かるようになる。

この法は、他の法と矛盾するものではなく、人の進歩に應じて、初めて感得できるものである。

魂と霊

1. 靈魂の憑依とは、靈魂が原因でなく、人間の側に原因があるということである。つまり人間がそういう憑依条件を作るからである。人がもし調和と正見をもち、奉仕に心がけ、利己心や悪意や欲望をもたずに、生活を貫くなら、憑依は絶対に起こらない。

シルバー・バーチ靈言集 潮文社 A・W・オースチン